邪馬台国はどこに？

前青森県立保健大学　特任教授　小山内　豊彦

写真1：纒向遺跡

旅行等で大阪伊丹空港に向かう時、飛行機が着陸態勢に入り、奈良県や大阪府の上空で次第に高度を下げていくと、地上に不思議な光景が現れる。鍵の穴のような形状の構造物が、いくつもいくつも点在しているのである。青森に住んでいると見たこともない、構造物、それは古墳である。3世紀後半から7世紀後半まで、大和政権の力が及んだ、関東以西において造られたものであり、特に前記した奈良や大阪に数多く存在する。

その最大のものは、かつて「仁徳天皇陵」と呼ばれていた「大山古墳」であり、全長が約486mに及ぶ前方後円墳である。この古墳を訪ねると、やはり奈良・大阪近辺が今の日本の発祥の地であるということを納得させられる。

ところで、その古墳時代初期の古代史最大の謎と言えば、邪馬台国はどこにあったのか、である。いまでも「畿内説」と「九州説」という二つの説が対立し、互いの立場を譲っていない。この対立は実は、江戸時代に端を発しており、新井白石や本居宣長らが独自の説を展開した。この論争は明治時代に入ってからも続き、京都大学の内藤湖南氏は「畿内説」を、東京大学の白鳥庫吉氏は「九州説」を唱えたが、戦前においてはどちらかと言えば「九州説」が有力であった。

というのも、もしかすれば後の大和政権に通じる「邪馬台国畿内説」を採ると、日本帝国（当時）のルーツである大和政権（の前身）が、当時日本帝国が支配を強めようとしていた中国の過去の王朝（魏）に貢物をもって頭を下げていた（朝貢していた）、と解釈されるからである（一方、九州説ならば、朝貢したのは一地方政権ということにとどまる）。

この論争について、歴史の授業で講義しようとしていた私は、2022年の秋、「畿内説」に有利な根拠として、近年注目されている奈良県桜井市の「纒向遺跡」と、そのエリア内に存する「箸墓古墳」を訪ねた。

「纒向古墳」（写真1）においては2009年に、卑弥呼と同時代に造られた最長20m近い大型の建物群や、全国各地の土器や土木工事に用いる工具が発見され、俄然「畿内説」が有望とみなされ始めた。さらに、一説には卑弥呼の墓と称される「箸墓古墳」（写真2）を放射性炭素年代測定法により計測した結果、箸墓古墳は卑弥呼が活躍した西暦240～260年の間に造られたことが判明した。こうしたことから、「畿内説」と「九州説」を併記しながらも「畿内説」を有力と表記する教科書も登場したのである。

写真2：箸墓古墳

しかしながら、そもそもなぜ「畿内説」と「九州説」の両説が唱えられるのかと言えば、当時の「倭」について記された「魏志倭人伝」に示されている邪馬台国までの里程に不分明な部分があるからである。例えば、邪馬台国までは「奴国」（今の博多）から南へ水行20日、さらに水行10日余りも要すると記されており、これでは南西諸島のあたりに邪馬台国があることになってしまうのである。「九州説」を唱える学者たちは、「魏志倭人伝」の途中から距離の尺度が変更された、とか、途中からの距離は放射状の距離と解釈するべきである、という説を編み出し矛盾点を解消しようとしているが、いかにも苦しい解釈である。

これに関して最近興味深い本を読む機会を得た。『魏志倭人伝の謎を解く―三国志から見る邪馬台国』という本である（「中公新書」）。その著者の渡邉義浩氏は日本史の研究者ではなく、古代中国史の研究者である。その主張するところは、大まかにいえば「魏志倭人伝」を著した陳寿という学者が、「魏・呉・蜀」の三国志をめぐる歴史において、「魏」を正統たる王朝と位置付けるべく、「魏」のライバルである「呉」（現在の上海を中心とする国）の背後には「倭」という有力な国が存在していると偽るため、「東」と記すべき「奴国」からの方向を「南」と故意に捻じ曲げたというのである。

確かに「呉」の海上背後の南西諸島に邪馬台国という一大勢力が存在しているとすれば、「呉」にとっては脅威となり、「魏」の政治的優位性に資することになるのである。一方で、「奴国」から東へ〝水行20日、さらに水行10日あまり〟という里程であれば、「畿内説」と矛盾はしない。いかに3世紀末に書かれた書物とは言え、当時の測量技術からみてもその里程の記述において「南」と「東」を間違えることなどありえないのではないだろうか。陳寿は、やはりあえて異なる方角を記載し、「魏」に阿ったと考えるのが自然ではないか。

ただ、当時の中国人の発音などは全く及びもつかないけれども、そもそも〝ヤマタイコク〟と〝ヤマト〟という発音は似ていたのではないだろうか。それをもって「邪馬台国畿内説」が有利であると考えるのは楽天的にすぎるであろうか。